

共感性と他者意識に関する研究

矯正協会附属中央研究所 奥 平 裕 美
 木 村 正 孝
 古 曳 牧 人¹
 高 橋 哲 子
 栗 栖 素 子
 徳 山 孝 之
 井 部 文 哉²

キーワード：共感性 多次元共感測定尺度 多次元共感性尺度 対人的反応性指標 他者意識 他者意識尺度

I はじめに

1 非行少年の共感性

「非行を行う少年は、共感性に乏しい」ということがよく言われ、それが、一般的にも受け入れられやすい見方であるように思われる。

当中央研究所では、これまでに非行少年の共感性に関する一連の研究を行っており（大川ら，1997；1998），家庭環境などとの関連について検討を加えている。ただし，当中央研究所が総務庁青少年対策本部（現 内閣府政策統括官（共生社会政策担当））からの委託を受けて行った研究（2000）では，非行少年の共感性は，一般の中学生や高校生よりも高いという結果が得られており，冒頭に述べたような一般的なイメージとは逆の結果となっている。また，成人犯罪者を対象とした研究（Deguchi, 1993）においても，殺人，強盗，強姦などの凶悪犯罪者群の共感性は，非粗暴犯罪者群（窃盗，詐欺等）や一般群（大学生）に比べて高くなっている。こうした結果については，非行少年や凶悪犯罪者は，「身近な人には過剰なまでの思いやりを見せるが，その他の人に対しては全く示さないといった，相手により極端な差があるのではないか」という考察がなされている（総務庁青少年対策本部，2000）。

ところで，「共感性」に関するこれまでの研究を概観すると，日常生活で使用されている意味での「共感性」という一般的な言葉から研究が始まり，その共感性の内容の検討も

¹ 現所属：川越少年刑務所

² 前矯正協会附属中央研究所

進んできた。測定尺度についても、研究の進展と並行して、多くの種類が開発されてきている。近年では、共感性を主に認知面と情動面の両面から考えることが一般的になっており (Hoffman, 2000), 測定尺度に関しては, Davis (1983) が開発したものが用いられることが多くなっている。Davis の開発した尺度については, 因子的妥当性や信頼性などの検討が必ずしも十分でないとの指摘もあるものの (桜井, 1988; 明田, 1999), その有用性については, 一定の評価を受けている。

Davis (1994) は, 共感性の「組織的モデル」(図1) を提案しており, その構成要素である4因子(この4因子がモデルを構成するすべてではない。)を測定する Interpersonal Reactivity Index (対人的反応性指標; 多次元共感測定尺度, 多次元共感性尺度とも訳される。以下「多次元共感測定尺度」という。)という尺度を開発している。日本語版には, 桜井 (1988) や明田 (1999) によるものがある。

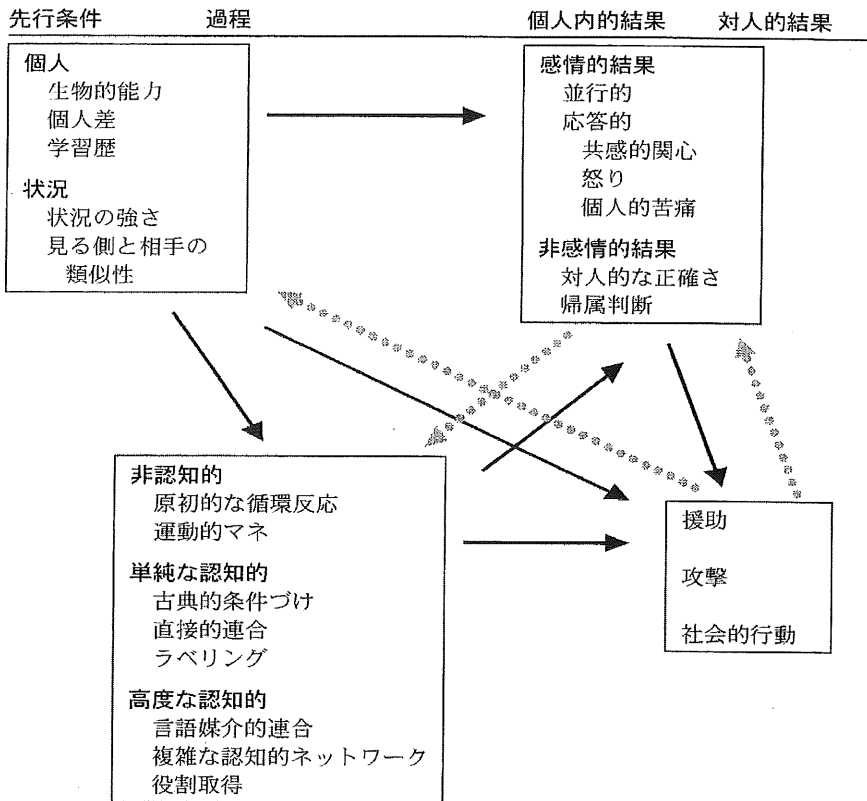


図1 共感の組織的モデル (Davis, 1994, 菊池訳 (p256) より抜粋)

多次元共感測定尺度の4次元（因子）とは、以下の4つである。

- 1 「共感的関心（EC ; Empathic Concern）」
- 2 「個人的苦痛（PD ; Personal Distress）」
- 3 「視点取得（PT ; Perspective Taking）」
- 4 「ファンタジー（FS ; Fantasy）」

Davis (1994) によれば、共感的関心（EC）は、「不幸な他人に対して同情やあわれみの感情を経験する傾向」、個人的苦痛（PD）は、「他人の大変な苦痛に反応して、こちらが苦痛や不快の経験をする傾向」、視点取得（PT）は、「日常生活で自発的に他人の心理的立場をとろうとすることについての報告された傾向」、ファンタジー（FS）は、「想像上で自分を架空の状況の中に移し込む傾向」とされている。

ここで、視点取得について、「日常生活で自発的に他人の心理的立場をとろうとすることについての報告された傾向」とやや回りくどい言い方がされているのは、視点取得が、他者の視点を取ろうとする傾向、それも本人から報告された傾向を指しており、さらに言えば、必ずしも結果としての正確な認知を必要としていないことを意味している。

登張（2000）は、Davis の研究を中心として、これまでの共感性に関する研究を概観する中で、多次元共感測定尺度の各次元と、様々な社会的行動に関係する諸変数との関係を整理している（表1）。

表1 多次元共感測定尺度の4次元と他の変数との関係（登張，2000）

他の特性	共感的関心	個人的苦痛	視点取得	ファンタジー
情動性	+	+	ns	+
制御性	ns	-	+	
社会的望ましさ	+	ns	+	ns
他者への感受性	+	ns	+	+
向社会的行動	+	ns	+ a	ns
攻撃性	ns		-	
年齢	+	-	+	ns

+ : 有意な正の相関

- : 有意な負の相関

ns : 有意な相関なし

空欄はデータがないことを示す。

a : 視点取得条件を与えられた場合

このような研究の流れを踏まえて、非行少年の共感性について考えてみたい。先に述べたような、非行少年についての「相手によって、思いやりを示す、示さないが大きく異なるのではないか」という仮説は、非行少年の共感性は、情動面では一般の人と比べても遜色ないか、むしろ高い一方で、認知面については、心理的な距離が遠い人の立場を考えることが困難である、と考えられる。このことは、共感性を多次元的に測定することによ

て検証できる可能性がある。

2 共感性の測定に伴う問題

次に、非行少年に共感性尺度を用いる際の問題について述べたい。先に述べたように、共感性を測定する尺度には様々なものが開発されているが、総じて質問の意図が回答者に分かりやすい表現となっている。このことは、一般の被験者にもある程度生じる問題であるが、特に、矯正施設に収容されている非行少年においては、社会的に望ましい方向に回答が歪曲されるという問題が生じやすいことを意味する。

刺激や条件をそろえた厳密な比較ではないものの、田村（1993）は、非行少年のうち、少年鑑別所在所中の者が、最も社会的望ましさの影響を受けやすく、次は、少年院在院中の者であることを示している。少年鑑別所在所中は、審判で処分を受ける直前であり、審判の資料となる各種の面接や調査、行動観察が行われている状況にある。また、少年院在院中についても、成績が進級や出院に結び付いているだけに、自分を良く見せようという気持ちが働き、質問紙による調査を実施した場合、社会的に望ましい方向に回答が偏りやすくなると考えられる。

こうした結果からさらに考えると、少年院在院中においては、入院したばかりの時期に最もこうした歪曲が強いことが予想される。このころは、まだ少年鑑別所での緊張感が持続しているか、少年院という環境にまだ慣れておらず、実際以上に自分を良く見せたい気持ちが強く働いているか、もしくはその両方の状態であると考えられる。例えば、少年院在院者の共感性等を測定した大川ら（2000）の研究では、初入の出院時、再入の入院時、再入の出院時よりも、初入の新入時の方が共感性の得点が高くなっているが、これも、彼らが考察しているように、上記のような回答の歪曲が結果に影響したと見ることができる。一般との比較を行う調査に当たっては、特に非行少年に関して、このような回答の歪曲を少なくする工夫を行う必要があるだろう。

3 他者意識について

他人を共感的に理解し、それに基づいた行動をとるためには、まず、他者を意識する必要があるが、どのように他者を意識しているかによって、共感性の在り方にも違いが現れてくることが考えられる。

他者への意識の向け方については、辻（1993）が他者意識として理論化を行っており、共感性との関連についても検討している。彼は、自己意識との対比の中で他者意識の理論化を行い、他者意識が3つに分かれることを示している。

他者意識の元になった自己意識については、もともと1次元的なものと考えられていたが、研究の進展の中で、私的自己意識（private self-consciousness；他者からは観察できないプライベートな自己への注意の焦点付け傾向）、公的自己意識（public self-consciousness；他者からも観察可能なパブリックな自己を意識する傾向）の2つに分かれると考え

られるようになっている。辻は、当初、自己意識に対応した形で他者意識を考えていたが、尺度作成の過程で、他者意識は、大きく現前する他者への意識と、回想または空想の中の他者への意識（空想的他者意識）に分かれ、さらに前者は、その内面への関心（内的他者意識）と外面への関心（外的他者意識）に分かれると考えるようになっている。

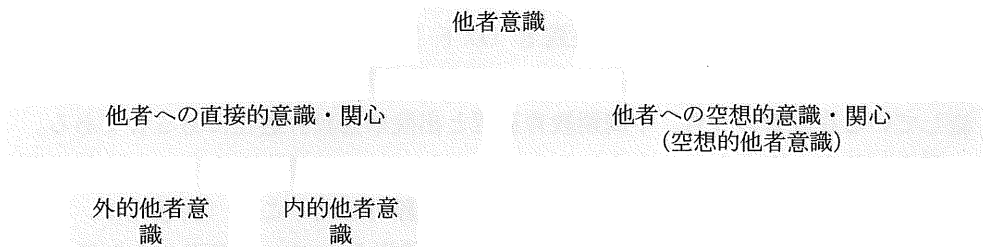


図2 他者意識の構造（辻，1993）

さらに、辻（1989）は、自身が開発した他者意識尺度の3因子と、Davisの多次元共感測定尺度の4因子の相関を調べており、内的他者意識は共感的関心及び視点取得と、空想的他者意識は視点取得と、それぞれ正の相関を持つことを見いだしている。空想的他者意識とファンタジーとの間には、有意な正の相関が見られなかった($r = .19$)ものの、全体的には、彼の仮説を支持する結果を得ている。ただし、この研究で用いられた他者意識尺度が、まだ作成途中のものであることには留意する必要がある。

さて、こうした文脈で非行少年の他者意識を考えてみると、経験的には、外的他者意識が高く、内的他者意識や空想的他者意識が低いことが予測される。さらに、辻が示した他者意識と共感性の相関関係がそのまま当てはまるのであれば、非行少年の場合、視点取得や共感的関心の得点が低いという結果が得られることになると思われるが、共感性のところで述べたように、視点取得が低く、共感的関心が高いという結果が予想されることを考えると、両者の相関関係が一般の人と非行少年では異なることも考えられる。

II 目的

非行少年の共感性を多角的に測定し、その特徴を明らかにするとともに、他者意識も測定し、両者の関係を検討する。

Ⅲ 方法

1 調査対象

(1) 非行少年

調査対象とした非行少年については、先に述べた社会的望ましさによる回答歪曲の影響を少なくするために少年院在院者（以下「少年院在院者群」という。）とした。具体的には、中等少年院（長期処遇）の職業能力開発課程（分類級：BV2級）に在籍している在院者のうち、中間期教育過程と出院準備教育過程にある者である。

調査対象者の選定をこのようにした理由としては、後述するように、比較対象が大学生になることから、比較的年齢が低い少年は除外したいこと（共感性は、年齢と正の相関がある）、また、多次元共感測定尺度で使用されている表現がやや難しいため、ある程度の知的能力を備えた対象者に調査を実施したいこと、かつ、BV2級は、長期処遇の中では数の上で中心的な層であることから、今回の調査結果を少年院在院者の全体的な傾向としてみなすことに大きな問題がないことが挙げられる。

調査対象施設の内訳は、以下のとおりである。

- ① 男子少年院：15庁×16名（中間期8名+出院準備期8名）=240名
- ② 女子少年院：8庁×6名（中間期3名+出院準備期3名）=48名

回答に不備のない有効な調査票は、265名分であった。内訳は、男子223名、女子42名、平均年齢は18.0歳（SD=1.4）であった。表2に、群別及び男女別の調査対象者の人員の内訳を示す。

表2 調査対象者の群別及び男女別人員

	男性	女性	計
在院者	223	42	265
(%)	(84.2)	(15.8)	(100.0)
大学生	430	288	718
(%)	(59.9)	(40.1)	(100.0)
計	653	330	983
(%)	(66.4)	(33.6)	(100.0)

(2) 大学生

少年院在院者群の対照群は、大学生とした（以下「大学生群」という。）。

先に述べたように、共感性の高さは、一般に年齢と正の相関があるとされており、可能であれば少年院在院者群との年齢を厳密にそろえた上で調査を実施したいところであるが、調査実施の都合上大学生とした。平均年齢は20.1歳（SD=2.3）であり、

少年院在院者群よりも2.1歳高い。性別は、男性430名、女性288名であり、少年院在院者群よりも女性の比率が高い。

なお、大学生群の調査対象人員は、当初は、少年院在院者群と同数程度の人数を予定していたが、予想以上に多数の協力が得られたため、最終的には718名となった。大学生群の所属学部は、多岐にわたっている。

2 調査時期

平成16年10月12日から同年11月15日まで

3 調査方法

質問紙法である。

(1) 少年院における調査

各少年院において、送付された少年用調査票を、中間期及び出院準備期の少年に実施した。調査対象者の選定は少年院が行った。

調査票への回答は、任意とし、回答したくない意思を表示した少年の調査票は白紙で回収した。各少年院において、記入済みの調査票を取りまとめ、当中央研究所に返送するよう依頼した。

また、後述する職員用調査票は、公的資料等に基づいて施設職員が記入するよう依頼した。

(2) 大学における調査

当中央研究所の職員及び客員研究員が勤務する大学において、講義等の時間に調査への協力に応じた大学生に対して、調査を実施した。

4 調査内容

(1) 調査対象者の年齢及び性別

(2) Davis の多次元共感測定尺度 (桜井, 1988)

先に述べたように、「共感的関心 (EC)」、「個人的苦痛 (PD)」、「視点取得 (PT)」、「ファンタジー (FS)」の4次元から成る尺度である。全28項目である。

なお、質問文のうち、理解が難しいと思われる部分は、原文の趣旨を損ねない範囲で、平易な言葉に置き換えてある。本論文末尾に、次の他者意識尺度も併せて、質問文と各因子との対応を資料として添付したので参照されたい。

(3) 他者意識尺度 (辻, 1993)

内的他者意識、外的他者意識、空想的他者意識という3因子構造の尺度である。全15項目である。質問文は、オリジナルのまま使用している。

(4) 教育プログラム受講の有無

少年院在院者群については、調査対象者が「被害者の視点を取り入れた教育」、「生

命尊重教育」等又はこれらに類する教育プログラムを受講したか否かを把握するため、職員用調査票により、その有無を尋ねている。

なお、この項目については、受講の有無による厳密な比較を意図したものではなく、参考として尋ねたものである。

IV 結果

1 多次元共感測定尺度

回答を1点から5点までで得点化し、逆転項目の得点を変換した上、Davis (1983) と同様、それぞれの次元に含まれるとされる項目の得点を合計して、下位尺度得点とした。

表3と図3に、少年院在院者群と大学生群それぞれの平均値と標準偏差を示す。

表3 多次元共感測定尺度の下位尺度得点

			N	平均値	標準偏差	t値
共感的関心	EC	在院者	265	21.19	3.95	7.83 **
		大学生	718	18.96	3.97	
個人的苦痛	PD	在院者	265	17.81	4.25	0.47
		大学生	718	17.95	3.94	
視点取得	PT	在院者	265	16.91	4.05	5.54 **
		大学生	718	18.55	4.15	
ファンタジー	FS	在院者	265	19.67	4.25	1.84
		大学生	718	19.05	4.83	

** p < .01

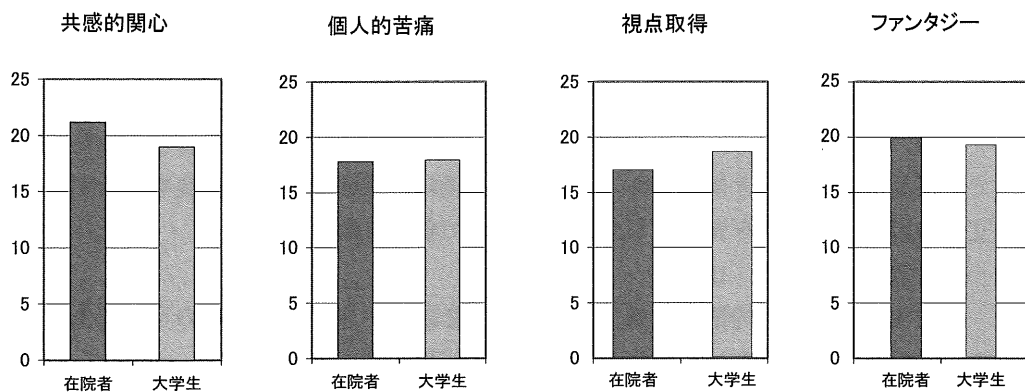


図3 多次元共感測定尺度の下位尺度得点

下位尺度ごとに、在院者群と大学生群の平均得点を比較したところ、共感的関心については、大学生群に比して、少年院在院者群の方が有意に高い得点 ($t(1)=7.83, p<.01$) を示しており、視点取得については、逆に、少年院在院者群の方が、有意に低い得点 ($t(1)=5.54, p<.01$) を示しているという結果が得られた。

2 他者意識尺度

回答を1点から4点までで得点化した上、辻 (1993) の分類のとおり、項目の得点を合計し、下位尺度得点とした。

表4と図4に、少年院在院者群と大学生群それぞれの下位尺度の平均値と標準偏差を示す。

表4 他者意識尺度の下位尺度得点

		N	平均値	標準偏差	t値
内的他者意識	在院者	265	23.66	5.05	0.30
	大学生	718	23.52	6.43	
外的他者意識	在院者	265	13.80	3.48	3.68 **
	大学生	718	12.85	3.60	
空想的他者意識	在院者	265	13.31	3.25	2.33 *
	大学生	718	12.74	3.51	

** $p < .01$; * $p < .05$

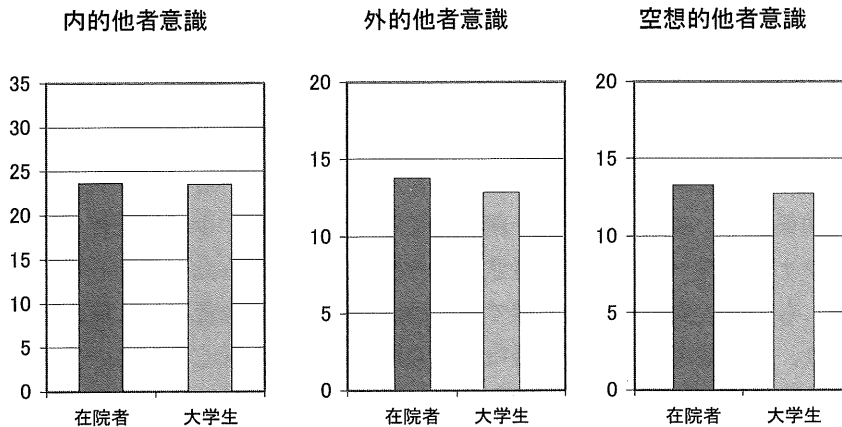


図4 他者意識尺度の下位尺度得点

下位尺度ごとに、少年院在院者群と大学生群の平均得点を比較したところ、外的他者意識、空想的他者意識については、大学生群に比して、少年院在院者群の方が有意に得点が高い ($t(1)=3.68, p<.01$; $t(1)=2.33, p<.05$) という結果が得られた。

3 多次元共感測定尺度と他者意識尺度の相関関係

少年院在院者群と大学生群のそれぞれについて、多次元共感測定尺度と他者意識尺度の下位尺度得点の相関を見たものが表5と表6である。

表5 在院者の多次元共感測定尺度と他者意識尺度の下位尺度間の相関

		内的他者意識	外的他者意識	空想的他者意識
視点取得	PT	.30 **	-.22 **	.12
共感的関心	EC	.33 **	.16 *	.20 **
ファンタジー	FS	.31 **	.33 **	.41 **
個人的苦痛	PD	.15 *	.25 **	.19 **

** p <.01; * p <.05

網掛けは、相関係数.40以上

表6 大学生の多次元共感測定尺度と他者意識尺度の下位尺度間の相関

		内的他者意識	外的他者意識	空想的他者意識
視点取得	PT	.52 **	.08 *	.29 **
共感的関心	EC	.53 **	.35 **	.48 **
ファンタジー	FS	.46 **	.30 **	.47 **
個人的苦痛	PD	.04	.31 **	.31 **

** p <.01; * p <.05

網掛けは、相関係数.40以上

相対的な数値の高低の傾向は似ているものの、少年院在院者群の方が、全体に、多次元共感測定尺度と他者意識尺度との間の相関係数が低くなっていることが大きな特徴である。表では、相関係数が0.40以上のものを網掛けで示しているが、少年院在院者群でこれに該当するのはファンタジーと空想的他者意識との相関のみであった。また、相関係数は低い ($r = -.22$) もの、少年院在院者群では、視点取得が外的他者意識と負の相関を示している、つまり、外的他者意識が高い者ほど視点取得の得点が低くなっている点が注目される。

4 教育プログラム受講の有無

少年院在院者群を、教育プログラム受講の有無で2群に分け、両群の間で多次元共感測定尺度の下位尺度得点に差が見られるかを検討したが、いずれの下位尺度においても、有意差は認められなかった(表7)。

表7 教育プログラム受講の有無と多次元共感測定尺度の下位尺度得点

			N	平均値	標準偏差	t値
共感的関心	EC	受講有	132	21.58	3.49	0.20
		受講無	119	21.67	3.43	
個人的苦痛	PD	受講有	132	17.69	4.28	0.98
		受講無	119	18.22	4.26	
視点取得	PT	受講有	132	17.00	4.21	0.18
		受講無	119	16.91	4.09	
ファンタジー	FS	受講有	132	19.78	4.24	0.30
		受講無	119	19.94	4.13	

V 考察

1 多次元共感測定尺度

不幸な他人に対して同情やあわれみの感情を経験する傾向（共感的関心）は、大学生群に比して、少年院在院者群の方が高く、逆に、日常生活で自発的に他人の心理的立場をとろうとすることについての報告された傾向（視点取得）は、少年院在院者群の方が低いという結果が得られた。これらは、Iの1で示した仮説を支持するものであったと言える。

既に示したように、先行研究（表1）では、共感的関心は、社会的行動に関係する諸変数との関係は多く見られるものの、攻撃性や制御性との有意な相関はないことが示されている（登張，2000）。つまり、共感的関心が高くとも、必ずしも攻撃的な行動は抑制されないし、制御性も高くはならないということである。他方、視点取得は、多くの諸変数と関係があり、しかも、攻撃性と負の相関、制御性と正の相関を有している。これは、視点取得得点が高ければ、攻撃的な行動は抑制され、行動の制御性が高くなることを示している。こうした知見を考え併せると、本研究の結果は、非行と共感性の各因子との関連を説明し得るものだと言えよう。

2 他者意識尺度

今回示された、少年院在院者群の他者意識の特徴は、外面への関心（外的他者意識）や空想の中の他者への意識（空想的他者意識）が大学生群よりも高いことであった。内的他者意識には両者の間に有意差がなかったことも併せると、少年院在院者群は、大学生群に比べて他者への意識そのものが高いたと言えることができるが、そうした中で、相対的には、他者の内面への関心（内的他者意識）が低いと解釈することもできる。

3 多次元共感測定尺度と他者意識尺度の相関関係

少年院在院者群では、大学生群とは逆に、外的他者意識が高い者ほど視点取得の得点が低い傾向が示されたが、これは、大学生群に比べて、少年院在院者群の外的他者意識の得点が高く、視点取得の得点が低いことも含めて、在院者の特徴を示す興味深い結果だと言える。

少年院在院者群において、全般に共感性と他者意識との間の相関が低いことや、一部で負の相関を示していることは、他者に対する意識の在り方が、大学生群とは異なっていることに起因している可能性がある。今回使用した他者意識尺度では、意識の具体的な内容までは測ることができず、また、今回の結果からは、因果関係についてはっきりしたことも言えないが、共感性が他者への意識の向け方に影響を与えていると考えるよりも、他者への意識の向け方が共感性に影響していると考えの方が自然だと思われることから、今後、少年院在院者群と大学生群の他者意識の内容を明らかにすることができれば、他者意識と共感性の関係の違いを、少なくともある程度は説明できるようになるのではないかと考えられる。

また、登張（2000）が述べているように、多次元的視点から共感性の起源と発達を検討している研究はまだ少ないが、少年院在院者に社会性の面で未熟な者が多いであろうことを考えると、このような発達の段階からの検討は、少年院在院者群と大学生群の結果の違いを説明するための有効な視点を提供する可能性がある。

4 教育プログラム受講の有無

教育プログラムの受講の有無と共感性については、両者に有意差は認められなかったが、この結果は、教育プログラムの受講による共感性の向上効果がないことを示すものではない。その理由は、「被害者の視点を取り入れた教育」、「生命尊重教育」等の教育プログラム受講対象者は、もともと共感性が低い可能性がある上、プログラムを受講したことによって、共感性の向上が図られたという可能性もあるからである。この点について検討するためには、受講前後での比較を行うなど、厳密な比較が可能な調査デザインを採用する必要がある。今回の研究は、教育効果の検証を主目的としたものではないことから、そのような比較は行っていないが、少年院在院者群と大学生群の共感性の在り方の違いを示すことができた多次元共感測定尺度や他者意識尺度は、今後、共感性の向上に係る教育効果の詳細な検討を行うための有用なツールになり得ると考えられる。

VI おわりに

非行少年の共感性を高めるための指導に当たっては、多くの非行行動が攻撃性や制御性との関連が深いことから考えても、まずは、共感性を構成する要素を多次元的にとらえた上で、特に、大学生群に比べて得点の低い視点取得（日常生活で自発的に他人の心理的立

場を取ろうとすることについての報告された傾向)を高めていく働き掛けが必要になるだろう。ただし、これは、少年院において、従来から法務教官が日常的に指導していることであり、少年たちは、集団生活の中で、周囲の者の気持ちを考えるように繰り返し指導されている。おそらく、法務教官は、データを取るまでもなく、直感的に、少年たちの視点取得傾向の低さとこの点を指導することの重要性を感じ取っているのだと思われる。同時に、そうした指導は、もともと高い外的他者意識を内的他者意識へと導こうとするものであるということもできる。

そうした意味では、少年院の職員にとって、本研究の結果は特に目新しいものではないと思われるが、今回使用した各尺度を用いて教育の効果を客観的に測定し、例えば、ある指導方法がどのようなタイプの少年に効果を上げるのかを検討していくことで、より細やかな指導が可能になっていくのではないかと考えられる。

また、他者意識が、自己意識との対比の中で検討されてきたことを述べたが、他者意識と自己意識の間には相関関係があり、少年院在院者群において高得点であった外的他者意識は、公的自己意識との相関が高いことが示されている(辻, 1989)。公的自己意識とは、他者からも観察可能な公共的な自己を意識する傾向であるが、少年院在院者の場合、虚勢を張りがちなことから、こうした傾向はもともと強いことが予想される。少年院での様々な教育活動は、非行少年の自己意識や他者意識の在り方に変化を促しながら、共感性を高めていく方向にあるという見方ができるとと思われるが、こうした相互に関連する変数の時系列的な変化を測定し、それらの関連性を検討することは、処遇効果の検証や社会への説明責任を果たすという点で、意味のあることだと考えられる。

最後に、本研究の実施に当たり、御協力を賜った大学生の皆様、法務省矯正局をはじめ少年院の各位に対して、心からの謝意を表します。

引用文献

- 明田芳久 1999 共感の枠組みと測度：Davisの共感組織モデルと多次元共感性尺度(IRI-J)の予備的検討 上智大学心理学年報, 23, 19-31.
- Davis, M. H. 1983 Measuring Individual Differences on Empathy : Evidence for a Multidimensional Approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44(1), 113-126.
- デイヴィス M. H. 菊池章夫(訳) 1999 共感の社会心理学—人間関係の基礎— 第1版 川島書店 (Davis, M. H. 1994 *Empathy: A Social Psychological Approach*. Westview Press.)
- Deguchi, Y. 1993 A Study on Empathy of Offenders. *American Society of Criminology 45th Annual Meeting, Phoenix, ARIZONA. Program and Proceedings*. 170.
- ホフマン M. L. 菊池章夫・二宮克美(訳) 2001 共感と道徳性の発達心理学—思いやりと正義とのかかわりで— 第1版 川島書店 (Hoffman, M. L. 2000 *Empathy and Moral Development: Implication for Caring and Justice*, Cambridge University Press.)

- 大川 力・出口保行・大西美加 1997 非行少年の共感性に関する研究（その1）中央研究所紀要, 7, 71-83.
- 大川 力・出口保行・大西美加 1998 非行少年の共感性に関する研究（その2）中央研究所紀要, 8, 53-61.
- 大川 力・長谷川宜志・濱井郁子・嶋谷宗泰・茂木善次郎・中島千加子 2000 在院少年の意識の変容に関する研究（その1）中央研究所紀要, 10, 59-75.
- 桜井茂男 1988 大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感測定尺度を用いて—奈良教育大学紀要（人文・社会科学）, 37(1), 149-154.
- 総務庁青少年対策本部（現 内閣府政策統括官（共生社会政策担当））2000 青少年の暴力観と非行に関する研究調査（委託研究）.
- 田村雅之 1993 質問紙調査における非行少年の回答の歪曲について 犯罪心理学研究, 第31巻第1号, 1-12.
- 登張真稲 2000 多次元的視点に基づく共感性研究の展望 性格心理学研究, 9(1), 36-51.
- 辻平治郎 1989 他者の内面への関心, 外面への関心, および空想的関心—他者意識概念の明確化とその測定—甲南女子大学人間科学年報, 14, 31-48.
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 第1版 北大路書房

資料1 Davisの多次元共感測定尺度(桜井, 1988)(一部改変)

番号	因子	質問文
1	EC	スポーツなどの試合では、負けている方に応援したくなる。
2	PT	ある人に気分を悪くされても、その人の立場になってみようとする。
3	PD	緊張すると、いつもビクビクする。
4	FS	こんなことが起こるのではないかと、起こりそうなことをよく想像する。
5	FS/R	よい本や映画に夢中になることは、ほとんどない。
6	EC	ときどき、自分の目の前で突然起こったことに、感動することがある。
7	PT	友達をよく理解するために、彼らの立場になって考えようとする。
8	FS	面白い小説を読んでいる時、もしその中の事件が自分に起こったらどうだろうと、よく想像する。
9	PD	緊急事態で、助けを必要とする人を見ると、とりみだしてしまう方である。
10	EC	自分よりも不幸な人々には、やさしくしたいと思う。
11	PT/R	他の人たちの立場に立って、物事を考えることは困難である。
12	FS	すばらしい映画を見ると、すぐ自分を主役の人物に置き換えてしまう。
13	PT	どんな問題にも対立するふたつの見方(意見)があると思うので、その両方を考えるように努める。
14	PD	緊急な状況では、どうしようもなく不安な気持ちになる。
15	PD	感情が高ぶると、無力感に襲われる。
16	PT/R	自分の判断が正しいと思うときには、他の人たちの意見は聞かない。
17	FS/R	映画や劇を見ていても、平常心で、のめり込むことはない。
18	EC/R	不公平な扱いをされている人々を見ても、あまりかわいそうとは思わない。
19	PD/R	緊急状態でも、比較的うまく対処できる。
20	PT	何かを決定するときには、自分と反対の意見を持つ人たちの立場に立って考えてみる。
21	PD	緊急時には、どうしてよいか、わからなくなる。
22	FS	小説を読んでいる、登場人物に感情移入することがある。
23	PT	人を批判する前に、もし自分がその人だったら、どう思うだろうかと考えるようにしている。
24	EC/R	周りの人たちが不幸でも、自分は平気でいられる。
25	PD/R	傷ついた人を見ても、冷静な方である。
26	FS	劇や映画を見ると、自分が登場人物の一人になったように感じる。
27	EC/R	困っている人たちがいても、あまりかわいそうだという気持ちにはならない。
28	EC	もし自分を紹介するとしたら、やさしい人と言うと思う。

注1 因子欄のECは共感的関心, PDは個人的苦痛, PTは視点取得, FSはファンタジーを指す。

注2 各因子の欄に/Rと記載がある項目は、逆転項目を指す。

注3 回答形式は、「当てはまる」から「当てはまらない」までの4件法である。

資料2 他者意識尺度 (辻, 1993)

番号	因子	質問文
1	空想的	人のことをあれこれ考えていることが多い。
2	外的	他の人の服装や化粧などが気になる。
3	内的	他者の態度や表情を気をつけて見るようにしている。
4	外的	人の体型やスタイルなどに関心がある。
5	内的	人の考えをいつも読み取ろうとしている。
6	空想的	人のことにしばしば思いをめぐらす。
7	外的	人の外見に気をとられやすい。
8	空想的	人のことがいろいろと心に浮かぶ。
9	内的	人のちょっとした気分の変化でも敏感に感じてしまう。
10	内的	人の気持ちを理解するようにいつも心がけている。
11	内的	他人のちょっとした表情の変化でも見逃さない。
12	外的	表面的な他人の印象に心を奪われやすい。
13	空想的	人のことをよく空想する。
14	内的	他人の心の動きをいつも分析している。
15	内的	人の言葉や行動にはいつも注意している。

注1 内的・外的・空想的の3つの下位尺度から構成されている。

注2 回答形式は、「全くそうだ」から「全く違う」までの5件法である。